

- 1 派遣期日 平成 22 年 1 月 13 日（土）
- 2 研修先 学校名 筑波大学附属中学校
所在地 東京都文京区大塚 1 丁目 9-1
<http://www.high-s.tsukuba.ac.jp/jhs/>
- 3 研修内容 講演会及び授業参観・研究協議会

（１）講演会「新教育課程における学習のあり方」

講師：東京大学大学院教育学研究科教授 市川伸一

主な講演内容として、新教育課程における「教えて考えさせる授業」の推進についての話がすすめられた。1980年代の偏差値教育の「教え込み・詰め込み」の時代、1990年代の「ゆとり教育」の時代、そして2000年前後の学力低下論争を経て、教育界はいま新しい局面に入っている。

1990年代に「自立解決」「問題解決」「指導より支援」という方針の授業展開がなされてきた。そして、「教える」という言葉（そして行為）は、極めて悪いイメージがもたらされ、問題解決型の教科といわれる数学や理科ではそれが強かった。そのため、自力解決できる子とうまくできない子の個人差が目立つようになってきた面があった。

今回の新教育課程における授業の取り組みとして「教えて考えさせる授業」のあり方を提案したいと考えている。つまり、学校での授業においては、すべてを自力解決に委ねるのではなく、教科書に解説されていることや答えの出ている例題はいわゆる「受容学習」として教えた上で、それを理解確認し、さらに、理解深化で発見的な問題解決学習に取り組むという、シンプルなものである。そして「教えて考えさせる授業」において多くの課題を共有しながら学習ができるという利点があると考えている。

「教えて考えさせる授業」においては①教師からの説明②理解確認③理解深化④自己評価という４段階に沿って授業計画を立てることで「理解状態をどう診断するか」「より深い理解のためにどういう課題を設けるか」「自己評価はどのように次の授業に生かすか」などが意識され、例題に関する内容を十分に理解した上で深化をさせるため、結果として子どもたちからは「学習のねらいがよくわかる」「例題の解き方から問題解決の糸口がわかり、やりがいがある」と言われる授業となり、学習意欲も向上していくと考えられる。

（２）公開授業 3 学年 2 組 美術 題材名「鑄造でつくろう」

①題材について

本題材は、中学三年間の思い出を「かたち」として表そうというものである。制作活動の概要は①油土で原型をつくる②石膏二つ割りの鑄型をとる③ピューター（鑄造の素材）を鑄込む④磨いて仕上げるであり、ミニ彫刻制作のイメージである。

制作に先だって、木・石・ブロンズの三つの彫刻を直に鑑賞し、彫刻的な表現を味わい、絵画と対比させて彫刻表現の特質を考える活動を行った。この活動をいかして、彫刻の存在感、立体による表現のよさやおもしろさ、材質の放つ魅力を感じ取りながら表現し、制作に取り組めるように働きかけをしたい。

本題材の作品のサイズは小さい。もっと大きさのある塊に向き合わせることができれば、じっくりと表現を深めたり、量感を感じながらつくることができるだろう。技能面に関しては、油土による原型制作で、平面や曲面、稜線でかたちを構成することや、立体としてのフォルムの美しさ、粘土や道具の扱い方を工夫した表現を意識できるように働きかけ、彫刻的な表現に対する興味を深め、さらに素材が発する材質感のよさやおもしろさに気づくきっかけになるのではないかと考える。

②本時の目標

- ・ 鑄込みや割り出し・仕上げの方法を理解し、安全に注意して適切に行う。
- ・ 自分の制作活動をプリントを用いて振り返る。

③展開

	学習活動	指導上の留意点
導入 5 分	・ 号令 ・ 本時の学習内容を理解する。	・ 進度に合わせて各自の活動を確認させる。 ・ 鑄造の安全指導を行う。
展開 35 分	・ 各自の制作を進める。(次のいずれかを行う) 1 鑄型の石膏を流す 2 鑄型を二つに分け、原形を取り出す 3 鑄造する 4 割り出し・仕上げを行う ・ 待ち時間はプリントを用いてまとめなどを行う	・ 流れやポイントを確認させながら、行わせる。 ・ 安全に注意を払う。 ・ 状況を見て、作業場所の指示をする。
まとめ 10 分	・ 後かたづけ ・ 次回の活動の確認	・ 鑄型、作品や道具などの片づけの指示を行う。 ・ プリント回収

(3) 研究協議会の内容

平成 24 年度の新学習指導要領全面実施が近づいてきた。今回の改訂は、美術科の教育で育成する資質や能力がさらに重要視されたものになった。そしてこの視点から「内容」の構成が整理され、また、表現と鑑賞に共通して必要な資質や能力が共通事項として示された。指導要領で示されている育成すべき資質や能力の根底には、「既存の知識や造形表現技術の伝達でなく、個人の評価を生み出す力や生み出そうとする姿勢の育成がもっとも重要である」という考え方があると言えるだろう。これによって自分を生かす主体的な活動が引き出され、様々な力も育まれるというものであり、この個人的の価値を生み出す力や姿勢は生きる力につながっていると考えられる。

中学校の段階は、小学校で耕された自分の思いによって生み出そうとする意欲を育てつつ、新しい表現方法に出会い、発想を広げたり、技術を身に付け表現の幅や可能性を広げていたりする時期ではないかととらえている。学習指導要領指導計画の作成と内容の取り扱いにおいて、3年間で絵・彫刻、デザイン・工芸の中で、描く活動とつくる活動のいずれも経験させるようにすることとなっている。しかし、授業時数削減の中で、多くの中学校において立体の表現を取りあげにくい状況がある。そのため、粘土を使ってつくる活動をどのように工夫すれば実施しやすくなるかも併せて考えたい。

新指導要領への対応の3点

- ①彫塑的な表現，立体デザインの表現，どちらも可能な題材とした。
- ②共通事項を意識し，彫刻の様々な材質の性質やそれらがもたらす感情はどのようなものか，話し合い活動を入れ，素材の質感を感じさせて表現させるようにした。
- ③美術文化に対する関心を高められるように，鑄造の彫刻が果たす役割について触れるように考慮した。

4 感想

講演会と授業参観を通して感じたことは、新学習指導要領で示された内容を踏まえて、一人一人の生徒の基礎的・基本的な知識・技能と学び方を教え、関心・意欲、資質・能力を引き出すことが強調されている部分があり、生徒に任せる自力解決だけでなく「しっかりと教え、しっかりと引き出す」という観点から、どのような支援をするか具体的に示すことが学校の課題として求められているように思えた。そして、今回の研修により指導法の具現化に向けて、「何を教え、何を引き出す（内容）」のか、また「どのように教え、引き出す（方法）」のかを明確にして、習得、活用、さらには探求の学習を計画的に推進していく必要があることを強く感じる事ができた。